

英文學と貧困

中山, 竹二郎

<https://doi.org/10.15017/2332970>

出版情報 : 文學研究. 38, pp. 1-22, 1949-12-20. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :



英 文 學 と 貧 困

中山 竹 二 郎

一
英文學に於て、貧乏生活が如何に取扱われているか、を検討するのが本稿の課題である。

さて文學が貧困を取扱う立場はいろいろ有り得る。自己の体験として、貧乏の苦惱を歌う抒情詩人もある。また貧者の境遇を憫みと同情を以て觀察して、貴賤貧富の利害得失を靜に冥想する哲人もある。また他方には社會正義の觀念から、貧困を絶滅し階級を打破しようと叫ぶ革命的文人がある。これに反し貧困の宗教的意義を強調して清貧の美德を讃える予言者もある。

十四世紀以後の英文學には、こうした様々な角度から貧困が扱われてきた。しかしだいたい貧乏生活の現實は文學の題材としては適當でない。人生の醜惡な面に殊に興味を有つ自然主義作家は別として、各時代の詩人文人の多くは王侯英雄の運命、才子佳人の戀、花鳥風月の美を主題とした。クレア (John Clare, 1798—1864) のように悲慘な赤貧の中に一生を終つた詩人でも筆をとつては田園の美や戀愛を歌つてゐる場合が多い。謂わば貧困は文學の識閥下に置かれてゐる。これが大きく文學の面に顯われるのは、その時代の社會的情勢に因る。例えば十四世紀末に農民一揆

が起らざるを得ないような社會的不安の中に、または産業革命の結果として、多數の勞働者が貧苦に喘ぐ十九世紀初葉の産業不況期の中に、貧困がクロース・アツプされて文學者の心に映する。そして或者は貧者のために涙を流して泣き、或者は彼等に對する救濟方法を考へ社會改造を策するなど、作者の氣質によつて之に反應する態度が變つて來る。

さらに時代の文學思潮との關係も考えられる。十七世紀末葉から十八世紀の前半に至る古典主義時代のように、ひたすら優美と典雅とを追求する都會趣味に支配された時代では、文人は貧困という汚い現實に目を蔽うて、取て之を主題として取上げることをしなかつた。卑賤な窮乏な生活は文學の題材としてせいぜい刺身のつまくらいな價值しか認められなかつた。また十六世紀の末から十七世紀初葉にかけて、文藝復興期のイギリス文壇には詩文學、散文文學ともに多彩な大きな作品が出たけれど、下層階級の生活苦を主題としたものは少い。

二

私の考察は十四世紀後半をその出發点とする。此の時代には既に國會は存在していたが、無論後世のような民主主義的な議會でなく、下層階級の利益がそこに代表されるべくもなかつた。一般民衆は國王の政治的權力とカトリック教會の宗教的權威に服従することを美德として教えられていた。しかるに此の頃イギリスに黒死病が幾度か相ついで流行し、そのために國民人口が激減した。その結果、農業勞働力は不足する、生産は減する、勞働賃金は騰貴する。農民は條件の良い職場を求めて地方から地方へと移動した。政府は法令を出して勞働者の浮動を抑えようとした。そ

の外にも政治の中樞貴族の間に確執があり、失政が多かつた。

さらに宗教上の混亂が起つた。宗教改革の先驅者ウィクリフ (John Wycliffe, 1320—1384) は反ローマ的思想をさかんに説き、彼の説を奉する一派の僧侶は、新しい宗教思想とともに、階級打破、共產主義の思想を下層階級の間に植へつけた。政治的、經濟的、思想的の不安動搖のため、社會の底部に惡ガスが溜つてきた。この惡ガスに火を点じたのは最初のイギリス労働運動指導者といふべきジョン・ボオル (John Ball) であり、一三八一年農民一揆 (Peasants Revolt) という形で爆發した。ボオルの共產思想は、神は人間を平等に創り給うた、原始社會では紳士と農奴との差別は存在しなかつた、今日紳士階級が暖衣飽食の生活を樂しみ、農民が粗衣粗食の生活に耐えねばならぬのは全く人爲的な因習に因るものであり、神の意志に反する邪惡である、という宗教的見地に立つてゐる。農民一揆の當時に歌われた俗謡の一節

When Adam delved and Eve span

Who was then a gentleman ?

(大意——アダムが土を耕しエバが絲を績いだ昔に、誰が紳士階級に屬してゐたか。)

はまさにボオルの原始社會を理想とするユートピア的社會主義の理念を端的に表現してゐる。

同じく此の混亂時代に出て、有産徒食の上流階級を呪い、貧者のために歌つた詩人ラングランド (William Langland, 1330?—1400 ?) は、その社會思想に於てはボオルと全く異つた基盤の上に立つた。

ラングランドは下層階級の出である。彼は田舎の郷里からロンドンに上り、妻子をかかえてどん底の貧乏生活をし

た乞食坊主である。ロンドンの街をさすらい、阿呆も氣狂よと人から罵られ辱しめられながら、胸中に固い信仰と憂世の情を湛えていた。そして彼の社會政治に對する理念と、當時の暗い世相をその作品『百姓ピアズ』(Piers the Plowman)の中で歌つた。そこには宿無し、乞食、にせ巡禮、居酒屋の亭主、靴直し、鑄掛屋など、やくざな赤貧の渡世をする人々の世界が描かれ、彼自身が體驗したどん底の生活が記録されている。

作者ラングランドはこうした貧しい人達に熱い同情を示し、彼等を憫まない酷薄な有産階級に對し憤慨する。此の点でラングランドは「貧者の友」と呼ばれる價值がある。しかし彼は現代の意味に於ける無産階級の代辯者や勞働運動の闘士とは言えない。

第一に彼は共產思想に反對し、階級制度を是認する。しかも彼は貧困をさえ肯定する。乏しきに耐えて清い生活を營むことは精神的に望ましいという宗教的見地に立つて、彼は當時の勞働者が賃金の高きを求め美衣美食におごるのを慨嘆し、之を戒しめている。畢竟彼は清教徒的な、禁慾主義的な清貧論者である。

しかしラングランドは貧困の問題については深い考察をしている。通常貧困と呼ばれている状態には二つの種類、或は段階がある。粗末ながら雨露を凌ぐに足りる屋根の下に住み、粗末ながら營養失調に陥らぬだけの食物を攝り得る状態と、さらに進んでは生命保存のための最低必要條件を充し得ない極貧の状態とがある。後者の場合、すなわち彼の表現によると、「錢が無くて食物を購うことができず、しかも之を借りるための質草もない」状態にあつては、不合法の手段により食物を奪つても罪にはならぬ、と彼は言つてゐる。

ラングランドの『百姓ピアズ』は古詩の形式により書かれた詩篇であり、作者の眞摯な、ひたむきな精神を現わ

し、イギリス十四世紀世相を鮮明に描いている。同時代の太詩人チヨウサアの『キャンタベリ物語』ほど展望の廣さはないが、下層労働者の世界に深く徹している点で傑れた作品である。

十六世紀の前半には政治文學として有名なモアの『ユウトウピア』(Thomas More's *Utopia*)が出た。この書は無論作者が夢想した理想社會をえがき、貧困の現實を扱うものではないが、その第一巻にはイギリスに於て生計の途を斷たれた食者が竊盜の罪に問われて苛酷な刑に處せられる事實を述べ世相の一面を暗示している。

十六世紀の後半になると輝しいエリザベス女王時代に入るが、數多き文學作品の中に貧困生活を主題としたものは無いと思われる。廢類などん底生活に陥つた劇作家グリーン(Robert Green, 1560?—92)には自叙傳的な散文作品で惡の世界を扱つたものはある。シェイクスピアの中には、ロウミオに毒藥を賣る藥劑師の貧乏暮しや、佯狂のエドガアが演ずるトムの慘めな流浪者の姿などに、貧困生活のスケッチが試られているが、それは悲劇の展開途上の一齣に過ぎない。またシェイクスピアが下層労働階級に對し關心同情の薄い例としてはシーザーの凱旋を見に街に出て來る職人達をローマの護民官が一喝して追ひ返す場面がある。近代民主主義理念が未だ發達しない此の時代の詩人や文人に後世の社會的觀念の表現を求めるのは明かに誤りである。一四五〇年に再びケントに起つた暴動の首魁ジョン・ケイド(John Cade)をシェイクスピアは『ヘンリ六世』の第二部の中で、一介の無智蒙昧なやくざとして畫いている。王權の神聖を信じ、現存制度を肯定するシェイクスピアが、革命運動の指導者に同感し得ないのは異しむに足りない。

三

重苦しい清教時代にも、輕薄華美な王政復古時代にも、食しい人々の生活を思い遣る詩客文人はなかつた。十八世紀に入つて新古典主義が文壇を支配する時代になると、貴族趣味と都會趣味に浸つた文學は好んでその材料を珈琲店や客間に求め、卑賤な生活に眼を向けなかつた。ゴウルドスミス (Oliver Goldsmith, 1730—74) の *you and I*、*My Village* (1770) は荒廢していく農村を描つてゐるが、結局は作者の甘き追憶の感傷に終つてゐる。

ゴウルドスミスよりむしろ學究詩人グレイ (Thomas Gray, 1716—71) の方が貧者に對する同感と認識を表現してゐる。それは彼の絶唱『墓畔の悲歌』(“Elegy in a Country Churchyard”, 1750) の中である。詩人は黄昏どき、とある村の教會裏の墓地にたたずむ。そこには貧困な卑賤な生活を終えた村の農夫達が永遠に眠つてゐる。詩人はその百姓達のありし當時を偲んで冥想する。彼等は貧農であつたために儻れた素質を有ちながら田舎に埋もれ朽ちはてた。しかし世の多くの政治家や軍人の犯す罪過に陥らなかつた。人を殺戮し人を欺いて富貴を得ようとする淺ましい業をしないですんだ。卑賤な貧しい人生にも靜かな満足はあり得る。——こう詩人は考え、哀愁と憂鬱の中にある諦觀に達してゐる。ケインブリッヂ大學の碩學であり隱遁的な生活をした此の詩人は恐らく貧困生活の現實を知らなかつたであらうが、その時代には稀なほど、農民生活の貧困と素朴さに對する同情を示してゐる。

十八世紀の末に近づくと、政治的革命思想がイギリス文學の中にしだいに激しく動いて來た。貧しい者も富める者

と等しく生きる權利を有つという理念が、はやくも農民詩人バーンズ (Robert Burns, 1759—96) によつて大膽卒直に表現された。彼の抒情詩『それでも人間は人間だ』(“Aman's a man for a' that”) の中でバーンズは、貧しい勞働者も王侯貴族にたいし對等の立場にあると云い、自由平等の精神を素朴なスコットランドの方言で堂々と歌つてゐる。その中で彼は貧者の不屈な心構えを

Is there, for honest poverty,

That hangs his head, and a' that ?

The coward-slave, we pass him by,

We dare be poor for a' that !

(大意——律義な貧乏暮しだからとて、首をうなだれている奴があるか。意氣地なしの奴隷め、そんな男を相手に
はしないよ。貧乏したつて俺達は平氣だ。)

と述べ、また粗衣粗食を敢えて恥じない貧者の氣位を歌ひ、進んで上層階級を嗤ふ、

Ye see yon birkie, ca'd a' lord,

Wha struts, and stares, and a' that;

Tho' hundreds worship at his word,

He's but a coof for a' that.

(大意——それ、向うにごさる伊達な御仁、旦那と呼ばれ、ふんぞり返つて人を睨めつける。多勢の衆が仰せかし

こみ、何んぼへこへとしても、彼はやつぱり馬鹿野郎。)

ときめつけ、やがて世界中の人々が兄弟となる時が来るだろう、と結んでいる。

パアンズは常に農村の情景と戀愛を歌う詩人であり、あらわに階級思想を取扱うことは稀であり、今引用した一篇のごときは異例に屬する。しかしそれだけに大陸に起つた新思潮が如何にスコットランドの田舎にまで浸潤していたかを明かに物語っている。そして階級意識を有つ労働者自身の筆になる作品をプロレタリア文學というならば、パアンズは近代イギリスプロレタリア文學の草分けと稱してよからう。

しよしよロマンティズムの時代に入ると、フランスの革命思想の洗禮を受けた詩人達が多い。わけてもワアズワス (William Wordsworth, 1770—1850) は若い頃フランス革命運動の渦中に陥つて、危く一命を落さんばかりの瀬戸ぎわまで追いつめられた体験を有つていたが、激越な急進思想を表現する作品は今日残っていない。(彼は後年には保守的傾向が強くなつた。ブラウニングの謂わゆる *The Lost Leader* である。) しかしワアズワスは詩の用語とその題材を卑賤な田舎人の現實生活に求めるといふ詩作の態度を自ら表明した。したがつて彼の作品の中には赤貧な生活を営む人の姿が屢々現われる。(例えば、*"The Sailor's Mother"*, *"The Idiot Boy"*, *"Beggars"* など) といふ *"Goody Blake and Harry Gill"* の一篇はその筋が面白い。赤貧で孤獨な暮しをしている老婆が冬の夜の寒さに耐えかねて、近隣の木立ちに忍び入つて枯枝を拾う。木立ちの持主である青年はその現場で老婆を捉えて之を咎める。老婆は神に祈り、その青年を呪う。その呪いのため件の青年は一年中晝となく夜となく寒さに震えて苦惱するといふ物語である。貧者に對する情け知らずの者が受ける超自然的な報復を主題とした此の物語詩には、たしかに作者

の同情がその底に流れている。しかし貧困そのものに焦点が置かれていたのではなく、作者の自然觀と人生觀により、生活の現實が神秘的に浪漫的に彩られているのは、ワアツワスの他の多くの作品と同じである。

これについで想起されるのは詩人シェリ (R.B. Shelley, 1792—1822) である。彼は社會革命の熱情に燃え、壓迫されてゐる者貧しい者に對し溫い同情を注いだ。一八一九年マンチェスタに起つた民衆虐殺事件を報を聞くと、彼は痛憤措く能わず『亂世の假面舞踏』(*The Mask of Anarchy*) の一篇を書つて暴虐な爲政者を呪ふ、自由を奪われている民衆を反叛、驟起せしめようとした。この中でシェリは無告の民衆を憫み、禽獸にはそれぞれ憩う所があるが、イギリス人は家を有たぬと言ひ、また養育院と監獄からは苦痛に呻吟し寒さに泣く老若男女の悲鳴が聞えるとう。現實的な社會的な事件からの刺戟で書かれた此の詩にも、諷喻化、概念化の手法が多く用いられているのは、いかにもシェリらしい。政治詩として重要な此の一篇の中には、下層貧窮の人々に對する作者のほてるような同情は満ちているが、貧困生活そのものについて強い印象を與えないのは、此の詩人の作風から云つて、むしろ當然であるう。

四

既にシェリの場合に見られたことであるが十九世紀の二十年代、三十年代になると、貧困と、貧困を中心とする社會問題が、いままでと異つた意味に於て、文學を刺戟した。バアンズの場合の如き個人的な感情思想の表現に止らないで、當時の政治社會の問題と密接な連關を以て取扱われるようになった。更に進んでは文人が貧困救済のための社

會政策や經濟學說を唱道し、また社會主義と共產主義の理念を文學を通じて宣傳しようとして力めるに至つた。

中世のラングラント的な考え方によれば、貧困は宿命である。この運命に抗し得ない人間は貧困を甘受する外はない。しかし十九世紀人は貧困を人間社會が自づ創り出す醜惡さと觀じ、社會を改造することによつて、此の醜惡な汚れを拭い去ることが不可能でないと考えるに至つた。従つて貧乏生活の描寫そのものだけに満足しないで、貧困の苦惱を如何にして除去し、貧困を如何にして絶滅すべきかを論考した。

十九世紀の初めの頃、最も貧困の状態に置かれた階級は土地を所有しない小農民であつたが、産業革命が進展するにつれ、大都市の工場で働く職工の數が多くなつた。これら労働者の中には低賃銀、病氣、失業のため激しい生活難に陥るものが多く、貧困は急激な速度を以て深刻化した。在來の貧民救濟法 (Poor Law) の如き生ぬるい方法では彼等を餓死から救うことはできない。産業と社會の實狀は變つても、政治と立法は之に順應して變つてゆかない。依然としてイギリスの政治は貴族と大地主によつて支配され、労働階級は之に對抗する力を有たない。キリスト教會は、その眞の精神から當然貧しい者を擁護すべきはずであるが、特權階級にくみして労働者を顧みない有様である。そして労働階級も自分達の團結組織を有つていないので、官憲の壓迫に曝されてゐた。

一八一九年に起つたマンチェスター虐殺事件は當時の労働階級の窮狀と無力さの一例證である。貧困に苦しむ市民と飢餓に迫つた女子供は野外に集合して、穀物法令 (Corn Laws) の廢止と議會の改造を叫んだ。官憲は武裝警察隊を繰出し民衆を殺傷して之を解散せしめた。Waterloo 役を諷諷的にもこつて Peterloo の役と呼ばれる此の殘虐な事件は、詩人シェリは無論のこと、哲人カアライルを憤激せしめた。後年この神秘的哲人が社會改造の問題に本腰を

入れるに至つた最初の契機は此の事件にあるのではなからうか。

段々重大化してゆく貧困救済問題に對してはシャフツベリ卿 (Lord Shaftsbury, 1801—85) のような博愛主義的、人道主義的な運動にも徹底的な効果はなく、また「最大多数のための最大幸福」を看板にするベンサム (Jeremy Bentham, 1748—1832) 一派の功利主義的經濟學說も解決の成果を與えてくれない。なるほど土地貴族は没落したが、新興の産業貴族の下に、労働者は依然として低賃銀と失業の重壓に悩んだ。

労働階級みずから立つて社會改造運動の組織を起した。テアアティスツ (Chartists) の過激な政治活動はその一である。一八三二年に議會を通過した選舉改正法案に満足しない民衆が普通選舉法を主張し、社會的平等と衣食住に不自由のない生活權を要求した此の運動は一八四〇年代がその最盛期であり、暴力革命の色彩を帯びていた。一方また職業組合 (Trade Unions) の政治運動も漸く活潑となり、労働者達が所謂産業貴族に拮抗して自分達の生活を防衛すべき組織をつくつた。また他方には、國民の主食に課税する結果となる惡法——穀物法令の廢止を主張する The Anti-Corn Law League の猛烈な民衆運動も四十年代に盛んであつた。

こうした階級闘争と民衆運動の中から、階級意識の強い労働者の文學が生れたのは當然である。エビニイザ・エリオット (Ebenezer Elliot, 1781—1849) の『穀物法令の歌』 (Corn Law Rhymes, 1828) はその代表的な一つである。嘗てはヨークシャの靜かな自然美を歌つて満足していた此の詩人は、労働階級の貧困とその苦惱を傍觀することができなかつた。

My heart, once soft as woman's tear, is gnarled

With gloating on the ill I cannot cure.

(かつては女の涙の如く柔かりしわが心はかたくなりぬ、わが濟い得ぬ禍をしげく眺めければ。)

と自ら述懐しているように、彼は貧者を苦しめる敵に對し心からの憎惡と怒りを感じ、熱情をこめて之を歌つた。彼の『戦ふの歌』(“Battle Song”)は階級闘争に於ける無産者の意氣を激越な調子で表現している。ただし彼が所謂プロレタリア詩人と異なるところは、彼は神を信じ、その『戦ふの歌』の中でも『神の右手』(God's right hand)が我等に味方し「神の劍」(The sword of God)が敵の脚下になびくと云うような表現を用いて、宗教的情味を多分に有つてゐる点であらう。

エリオットは無産階級の出ではなく、鐵器商を營む商人であつた。しかし詩人クラブ(George Crabbe, 1751—1832)が貧困階級の生活を描いても自然科學者の冷さを終始保つたのに反し、エリオットは全く貧者の立場に立ち、彼等の苦惱、彼等の希望を自分の苦惱、自分の希望として、「貧者の詩人」(The Poet of the Poor)として泣いたり叫んだり罵つたり呪つたりした。

貧困者に對する同情の深い詩人としてフッド(Thomas Hood, 1799-1845)の名を逸することはできない。元來彼は諸諺を好み、滑稽な詩に長じた。貧困と病苦に迫られながら、恰も貧しい道化役者のように、人に笑いを供給することによつて辛くも渡世した。この諸諺詩人の筆から貧者に對する切實な同情を表わす、極めてまじめな、詩二篇が生れた。その一なる「シャツの歌」(“The Song of the Shirt”, 1843)は縫仕事をして渡世する一人の女が僅かな賃銀を稼ぐために精根を涸らしてシャツを縫う苦しみを叙している。これよりも文學的に傑れているのは『ため息の

橋』(“The Bridge of Sighs”)である。一人の若い女性が或る過ちを犯した(恐らく親の許さぬ戀をし、その果ては街の女の群に投じたのであらう)。生活苦に世をはかなみ彼女は橋から身を投げた。いま引上げられたその女の屍体を前にして、詩人は「蔑すまず、愛するやさしい心持ちで、此の女の屍骸を葬つてやれ」と乞ひ、「ああ、世に基督者の愛の乏しきことよ」と嘆じてゐる。

ディكنズ (Charles Dickens, 1812—70) はこれら詩人よりも遙かに偉大な文人であり、その作品は廣く人間性の諸面を描いてゐる。しかし彼の生立ち、作品のテーマ、その人間觀はみな貧乏生活と切り離して考えられなう。

短篇小説『クリスマス・キャロル』(A Christmas Carol, 1843) は因業な老人が心機一轉して貧乏人に温い慈悲を示す筋であり、作者一流の諸諷と感傷がにぎやかに織り交つてゐるが、貧苦に喘ぐ下層階級に對する同情の涙と社會正義の理念が貫いてゐる。傑作『デイヴィッド・カッパイルド』(David Copperfield, 1849—50) の主人公デイヴィッド少年が貧困の中に生長してゆく姿は作者の若い時のそれに似てゐる。ディكنズは貧家に生れ、十分な教育も受けなかつたが、下層生活の現實が彼に人間學を教えた。同じ頃に哲人カアライルが貧困問題を批判的な高い立場から論じたのに對し、ディكنズは貧困の實相を自分の體驗から描いた。また『せちがらゝ世間』(Hard Times, 1854) は功利的で人間の愛情を知らぬ金儲け一点張りの人々と、その壓迫の下に苦しい卑賤な生活を送る人々とを色鮮かに描き出してゐる。産業貴族、富者に對する作者の反感がそこに濃く出てゐる。また彼の傑作の一つ『大なる期待』(Great Expectations, 1860—1) に於ても、主人公ピップが最後に頼りとするのは富裕な紳士階級の人々ではなく、鍛冶職で渡世する無學で正直な一貧乏人である。ほてる様な温い心を有ち、じみちな生活をする無産者こそデイ

クンズの描いた世界に君臨する高貴な人間である。

デイクンズと同時代の女流作家ギaskell夫人 (Mrs. Gaskell, 1810—65) は牧師の家に生れ、マンチェスタ市の牧師に嫁した人であるが、その作『メアリ・バートン』(Mary Barton, 1838) に於て資本家と労働者の險惡な闘争を取扱ひ、無産者に對し深い同情を注いでゐる。勞資の對立感情は激化し、労働者は工場主を暗殺する。この事件と戀愛とからみ合つて進展し、職工の娘メアリは資本家の求愛を斥けて労働階級の愛人と結婚する。多少感傷的であるが三十年代のマンチェスタ市の工場生活を寫實的に描き、イギリス最初の『労働者小説』(labour novel) と評せられる。

五

かように詩や小説が下層社會の生活に興味を示して來た一方、批評文學の壇上からも、貧者を救ひ貧困を絶滅せよという強い叫び聲が聞えて來た。こうした社會改造論の口火を切つた文人はカアライル (Thomas Carlyle, 1795—1881) である。彼はスコットランドの貧しい石屋の息子であり、若い頃から生活難と闘ひ、また精神的苦悶を體驗した。しかし獨乙文學の影響を強く受けた彼の世界觀が著しく神秘主義的な、浪漫主義的な色彩を帯びてゐることはその名著『衣裳哲學』(Sartor Resartus, 1833—4) によつてうかがわれる。そこには信仰、懷疑、惡魔との闘争、神との和解が語られてゐる。また彼の社會觀は彼獨特の見地に立つてゐる。その『英雄崇拜論』(Heroes and Hero-Worship, 1841) によつて知られる如く、大衆は愚鈍である、英雄が出て大衆を指導するために人間は進歩する、と

彼は信じた。従つて當時盛んだつた政治社會の改造論者と彼の唱道する政策論ととの間に大きな差違があるのは異むに足りない。

しかし神祕主義的な浪漫主義的なカアライルを驅つて現實目前の民衆の生活に大きな關心を向けさせたのは、當時の社會改造問題の緊迫である。個人的情緒に沈潛する文人が經世の策を説く經濟學者と伍して、或は之と抗争して、貧困の根絶と人間生活の改善を論ずるに至つたのは十九世紀イギリス文學の新傾向であり、カアライルがその先驅者であつた。

社會、政治、産業に關するカアライルの説は、一八四三年の『過去と現在』(Past and Present)の中で明かにされた。彼獨特の激越な論調で憂世の熱情を吐露している。その所説を要約すると、

チャアティスツが主張する普通選舉法には反對である(大衆は愚衆である!)。しかし穀物法令の如き狂氣じみた惡法を廢止すべしとする点では彼等に同感する。

功利主義的經濟學者の説には大反對。(彼はベンサムが太嫌いだ。)

大地主、貴族階級は遊惰の徒であり、産業資本家は黄金崇拜症患者であると罵る。

最後に、現下の社會問題解決策として、教育の普及、利益分配法の改善、自由競争によらない勞働組織の必要を擧げている。

此の書に於てカアライルが貧窮な勞働者に心からなる同情を寄せていることは明かであるが、彼の眼から見ると勞働階級は蒙昧な大衆に過ぎないのだから、みずからの問題を處理する能力を欠いている、よろしく上の階級にある者

が労働者の生活改善に力を致すべきであると説き、政治家、地主、資本家、文人に訴えて、當の労働階級は相手にしない。歴史は偉人がつくる、英傑が天意を承けて民衆を導くのが眞の政治である、という歴史觀に立つカアライルの社會政策としては當然の態度である。

彼の提唱した政策はその後のイギリス労働運動が進んだ方面と異なる。しかし彼の説がその當時、及び後のイギリス文壇に與えた感化は大きかつた。既に述べたギアスケル夫人とデイクンズにはカアライルの影響が強いし、また同時にキリスト敎社會主義(Christian Socialism)の闘士として活躍した文人キングズリー(Charles Kingsley, 1819—75)の貧民救済の理念もカアライルの説に負う所が多かつた。社會主義を唱えながら、社會改善の基磐を個人の心意に求めたキングズリーの所説は労働階級に受入れられなかつた。ただしカアライルと異り、彼は労働者によびかけ、その覺醒を促した。

六

カアライルについて文壇から社會改造の問題に最も深い關心を示したのは、その弟子ラスキン(John Ruskin, 1819—1900)である。彼に於てもまた、個人的情緒の世界(文學、藝術)から社會的現實の世界(労働産業)へ關心が移つていつた跡が明かに示されている。本來ラスキンは美術批評家である。繪畫、建築、自然美の鑑識眼の鋭さと、これを論考し批評する文体の美しさに於て、ラスキンは英文壇の第一人者である。彼の大作『近代畫家』(Modern Painters)は彼の美學的研究の偉業である。

ラスキンはカアライルの社會改造に對する熱意に心を打たれた。齡四十の頃彼も心境の轉機に見舞われ、自然と藝術の美を探索する仕事にばかり没頭していらなくなつた。高度の近代文明を誇るイギリスの社會の底には極度の貧困にもがいてゐる勞働者の群があるし、自分の住むロンドン市の中に醜惡な貧民街がある。此の現實に眼を蔽うて美の世界に遊ぶことは彼の人道的な宗教的な意識が許さなかつた。同胞が生活の戦に倒れて傷つき呻吟してゐる戦場のほとりに、自分は緑の芝生に座して空飛ぶ雲を仰いで恍惚としていられようか。これは卑怯な自己的な態度だ、といふた感じを有つた。とは云え、ラスキンは美學を捨てて社會改造論者に轉向したのでない。彼にあつては美的生活と生産的勞働とは密接に連關してゐる。企業の利益を目的とする近代産業ではその生産品の美的價値を考慮しない。そのため近代人の生活は粗雑な、まがいの、醜いもので満ちてゐる。もし生産にたずさわる勞働者がそれぞれの天分を發揮し、藝術的良心を以て仕事をするような社會組織が實現すれば、勞働と藝術活動とは調和する。

このような社會組織を理想として、彼は獨自の人間的な經濟學を説いた。(彼は Ricardo や功利主義的な經濟學者の人間味のない學説を嫌つた。)彼の所説を要約すると――

まず貧困を社會から絶滅せねばならぬ。そして物質的・精神的な安寧が社會の各員のために確保されねばならぬ。財産の共有は認めるが、社會階級を設け、中世の封建制度に似た枠の中に置く。生産方法は大工場制度を廢し、手工業に歸すべきであり、中世に行われた職人組合 (guilds) の組織に倣つたギルド社會主義を提唱する。

かようにラスキンの社會改造論はユウトウピア的であり、中世への浪漫的懷古氣分が濃い。しかし當時の勞働運動が賃銀値上げをねらつてゐたのに對し、ラスキンは勞働者の人格と個性を尊重し、勞働者個々の天分を生かしてゆく

産業組織を強調した。彼によれば、藝術と勞働とが融合し、勞働者は即ち藝術家であり、その生産品は美的價值に富むものでなければならぬ。

ラスキンの社會改造への關心は決してディレンタニズムではない。イギリス商工業の繁榮の犠牲として、低賃銀と失業の恐怖に曝される無産階級が存在することは彼の社會正義觀が默視し得ない所である。彼はその理念を實現するために聖ヂョージ組合 (St. George Guild) を創立して之に私財の多くを投じた。

ラスキン獨目の經濟學說については彼の著作『この最後の者』(Unlo This Last, 1860—2)『胡麻と百合』(Sesame and Lilies, 1865)『橄欖の冠』(The Crown of Wild Olive, 1866)を併せ讀めばその全貌がわかる。これらの論說の或ものが初めて雜誌で發表された時、反對非難の聲が高く、雜誌主筆はその續篇の誌上掲載を拒否した。資本主義華かな當時のイギリス人は社會主義者を異端視していたのである。

ジハキンの後には、モリス (William Morris, 1834—96) がたつてその師ラスキンにも劣らぬ熱意を傾けて社會改造の運動に挺身した。

ラスキンが傑れた美術批評家であつたのに對し、モリスは藝術家であり詩人であつた。逞ましい精力と實踐力に恵まれていたモリスの藝術活動は多方面にのび、繪畫、建築、工藝、美術、印刷の分野で大きな業績をあげた。我々が日常生活に用いる家具が近代的生産方式のもとに如何に藝術的に墮落しているかを痛歎し、みずから室内美術品を制作してイギリス人の趣味を高めた。また書籍についても同様、みずから活字を考案し裝幀を工夫し、書籍を工藝美術品の水準にひき上げた。

モリスはこうした忙しい藝術活動のあいだに詩を作った。彼の趣味はすこぶる中世的であり、文學ではチョウサに私淑し、アイスマンドの中世紀物語文學に心酔した。けだし彼は現代社會の醜惡を嫌い、その壓迫から免れるために中世の世界に隠れようとしたのであらう。

モリスはしかし彼のあこがれた中世的美に晏如として陶醉していらなかった。イギリス社會の底にうごめく貧困のみじめな姿に眼を蔽うことができなかった。現代の工場制度の下にあつては畢竟藝術的生活は不可能であり、これを逃避しようとしても如何にもならぬ。むしろ現實の社會に飛び込んでゆき之を改造すべきだと彼は感じた。彼は政治運動に参加した。社會民主主義同盟に加入し、進んで社會主義から共產主義に傾いた。活動的なモリスはその旺盛な精力を社會主義革命の實際運動に注いだ。時には官憲のために逮捕されたこともあつた。革命運動が速急にその目的を達し難いことを悟るに至つても、彼の社會改造の熱意は失われなかつた。そして文筆を揮つて彼の政治思想を宣傳した。その中には『ジョン・ボオルの夢』(*The Dream of John Ball*, 1888)と題し、十四世紀に於ける農民の指導者を主人公とするロマンスや、機械も金錢も存在しないユウトウピアを描いた『理想郷通信』(*News from Nowhere*, 1891)がある。その外にモリスは藝術を志す若い人々のため、職工のために屢々講演をした。文學でも藝術でも、人間性を墮落せしめる貧困を此の地上から根絶しようというモリスの眞摯な意欲がこれらの作品や講演に溢れ
てゐる。

七

以上述べたカアライル——ラスキン——モリスの一系列をなす文壇人の示した貧者への同情と社會改造の理念が、實際の政治社會にどれほどの貢獻をしたか。當時危険な、或は敗徳的な人間としてうさん臭い眼で世間から見られていた社會主義者が今日ではイギリスの政權を握つてゐる。恐らく下層勞働階級の生活に著しい變化が現われているであらう。しかし十九世紀末から此の世紀の初頭に於てもイギリス文學には悲慘な貧困生活の多くの場面を描いてゐる作品が多い。詳述する邊がなうので、二三の作家を考えてみよう。

ハアディ (Thomas Hardy, 1840—1929) のウエセックス小説の中には貧窮そのものをテーマとしたものはないが、相當に數多くの貧乏人がそこに住んでゐる。そして人間を悲劇的運命に導く一つの契機として貧困が大きな役割を演ずる場合が多い。『村人歸る』 (*The Return of the Native*, 1878) の主人公クリム (Clym) の悲劇は彼を筋骨勞働者にまで身をおとさした貧窮がその誘因となつてゐる。また『テス』 (*Tess of D'Urbervilles*, 1891) の女主人公もその父親が裕福であつたら、アレック (Alec) に貞操を奪われることもなく、従つて彼を殺害するという破局に至らなかつたであらう。

ギッシング (George Gissing, 1857—1903) はその小説の中に好んで下層階級のどん底生活や貧窮ゆゑに卑しくなつた人間性を取扱う。『民衆』 (*Demos*, 1886) は勞働者の陰惨な世界と社會主義をテーマとしてゐる。しかし奇妙にも作者自身は勞働大衆にも社會改造運動にも何等の同情を有たない。殊に我々は彼の懺悔録とも云うべき『ヘンリ・ライクロフトの手記』 (*The Private Papers of Henry Ryecroft*, 1903) により、その青年時代に赤貧の境遇にあつたことを知つてゐる。ギッシングが好んでどん底の生活を取扱つたのは、人生の醜惡な面を特に材料としたフラン

ス自然主義文學の傾向に倣つたと考えられる。

ミア (George Moore, 1852—1933) はイギリスのソラであり、その『旅藝人の女房』(A Mummer's Wife, 1885) と『エスタ・ウオオタズ』(Esther Waters, 1894) には悲惨眼を蔽わしめる貧窮の生活を緻密に寫實的に描出してゐる。ミアの場合も、作者個人の貧者に對する人道主義的關心からというよりは寧ろ文學上のイズムから、そうした生活を取扱つたのであらう。十九世紀自然主義文學の理念を學んで以來、イギリスの文人は、むさい貧乏生活を寫實的に取扱うことを躊躇しなくなつた。

ベネット (Arnold Bennett, 1867—1931) の『ライイン・坂』(Riceyman Steps, 1923) は赤貧の寫實的描寫に於て近代の傑作である。ロンドンの場末に住み吝嗇のため文字通り餓死する老人夫婦の生活のまじめさと卑しさは讀者の心を打つ。醜惡の底に美を發見しようとする作者の文學理念が具体化した一つの例であらう。

他方、文學を通じてその社會理念を表明し、社會改造を説き、或は社會の欠陥を是正しようと志す作家が二十世紀にもその跡を絶たない。ショウ、ウエルズ、ゴオルズワアジなど、そのイデオロギーはそれぞれ異つてゐるが、いづれも文學の社會的効用をねらつてゐる点では軌を一にしている。それらの作品のなかで、ゴオルズワアジの『銀の筐』(The Silver Box, 1906) は同じ罪を犯したのも、貧乏人は厳しく罰せられ、有産階級のものには刑を免れるという不公正に對する抗議である。

あとがき

拙稿は昭和二十四年五月の九州大學文學部獨立記念講演會に於ける講演の手記に筆を加えたもので、一時間とさう

制限内に一とおりの主要な作品を考察せねばならず、そのため當然ふれるべき作家や作品を洩らした。本稿では多少そうした逸脱を補つてみたがまだまだ完全には程遠い。讀者の寛容を乞ひ、またその叱正と示唆により他日の修正を期したい。